

アーネスト・ヘミングウェイの作品に みられる言語表現

四方田 敏

1 はじめに

「アメリカの近代文学はすべて、マーク・トウェインの“Huckleberry Finn”という一書から発している」とヘミングウェイは言っているが、この言葉の中に、ヘミングウェイ自身の文学のあり様が示唆されているとすることができるであろう。

1920年代及び30年代のアメリカの文学作品には口語的スタイルで書かれたものが多くみられるのであって、例えば Saroyan, Caldwell, Steinbeck, Anderson 等の名が挙げられるのであるが、これらの作品の中でも Ernest Hemingway が何をさしおいても、いわゆるアメリカの口語の伝統に基づいて、かの決定的とも言うべき文体を創り出した代表的な文学者と考えて、決しておかしくない筈である。

Ford Madox Ford は Hemingway の言葉について「小川から取ってきたばかりの小石の様なもので、それらはそれぞれ、所を得て、生き生きと輝いている。彼の書くページの一つ一つが流れる水を通して見える小川の底と言うべき効果を持っている。それらの言葉は互いにきちんとはめ込まれたモザイク模様を成している」と述べている。

散文における口語性とは、先づ、一つ一つの言葉が個性的であり、具体性を持ち、また正確でなければならない筈である。今、ここで “To Have and Have Not” から一つのパラグラフを引用することにする。

Love was the greatest thing, wasn't it? Love was what we had that no one else had or could ever have? And you were a genius and I was your whole life. I was your partner and your little black flower. Slop. Love is just another dirty lie. Love is ergoapiol pills to make me come around because you were afraid to have a baby. Love is quinine and quinine and quinine until I'm deaf with it. Love is that dirty aborting horror that you took to. Love is my insides all messed up. It's half catheters and half whirling douches. I know about love. Love always hangs up behind the bath-room door. It smells like lysol. To hell with love. Love is you making me happy and the going off to sleep with your mouth open while I lie awake all night afraid to say my prayers even because I know I have no right to any more. Love is all the dirty little tricks you taught me that you probably got out of some books. All right. I'm through with you and I'm through with love. Your kind of picknose love. You writer. (愛こそ一番すばらしいものだったわね。愛とは二人だけのもの、他の人には判らない、判ることのできないものだったわね、そして、あなたは天才で、わたしはあなたの命のすべてだったわ、わたしはあなたの良き伴侶で、あなたの可愛い黒い花というわけ、安っぽい感傷よ、愛とはけがらわしいうそっぱちよ、愛なんて後始末に飲んだアエパピオールの錠剤よ、あなたが赤ちゃんをいやがるからよ、愛なんてキニーネよ、キニーネよ、キニーネだわ、つんぼになるくらい飲まれたわ、愛なんて、あなたが受けさせたあのけがらわしい、むごい墮胎手術よ、愛なんて、私のおなかをめっちゃめっちゃにすることだわ、愛なんて導尿管と注水器を合わせたものよ、わたしは愛のことは判っているわ、愛なんていつも浴室のドアのうしろにかかっているものよ、リゾールの臭いがぶんぶんするわ、愛なんて断然いやだわ、愛なんてわたしを飲ばせておいて、あなたは口をぼかんと開けて眠りこんでしまうものだわ、そしてわたしは一晚中睡らないで、祈りの文句さえ言うのをはばかりしている仕末、わたしにはもう祈りを言う権利がないことが判っているから

だけど、愛なんてあなたがわたしに教えこんだだけが面白い小さな計略にすぎないわ、それも多分どこかの本からあなたが借りてきたものよ、もういいわ、あなたとはこれっきり、愛もこれっきり、あなたのけがらはしい) 愛なんて、ああ、作家なんて)

これは愛の破綻を迎えるに至った夫婦における妻の方からのその夫に突きつけた絶縁宣言であることは一読すれば明かである。夫とに対する愛を完全に失った妻の憎しみの心のエネルギーが一気に噴き出した様子が端的な言葉遣いや実に具体的な表現(愛について錠剤やキニーネなどの物質によって叙述している)、simple な文の連結によってリズムカルな調子で烈しく表わされている。

以上は Hemingway の散文スタイルの一端を例示したのであるが、これによっても、彼がイメージの明確な確固たる表現力を持つ文学者であることが自と判るような気がするのである。筆者はこの小論において、アメリカの散文の口語スタイルを完全と言ってよいところまで創り上げた Hemingway の英語にあらわれてくるであろうアメリカ語法を追究したいと思うのである。勿論 Hemingway の英語の文体的考察それもできるだけ語法の面から観た考察を加える所存である。

2 表現法について

Hemingway のもっともすぐれた作品として有名な “The Snows of Kilimanjaro” には所々にイタリック体で書かれた回想の独白場面がみられる。その中で Hemingway は完全な文の体をなさない分詞構造でくりつけた様な構文を独立した形にして書いている。例えば The boy refusing and the old man saying he would beat him again. (その少年は拒絶したそして老人はまたぶんなぐると言った) He having no idea that he would be arrested. (少年は逮捕されるなどとは少しも思っていなかった) Thinking he had done his duty and that you were his friend and he would be rewarded. (少年は義務は果たしたし、二人は友達でもあるしほうびをもらえんと思っていた。)

このような書き方をすると、その部分だけが、他の文より目立って浮き彫り

されてくるのは明らかであり、とくに *refusing, saying, having, thinking* がはっきり目立ってくる、これは語に力点をおく Hemingway の意識的試みであって、単なる語にとどまらず、これら分詞構造そのものが一種の個体化すると言うことができる。

また Hemingway は或る場面の描写をつづけていて、その中途でその場面より更に以前の場面を語る部分を入れる場合にも、矢張り、イタリック体を用いて叙述する方法をとる。“To Have and Have Not” の中でそれがみられるのであって今まで過去形で書かれてきた文の中途にイタリック体の *That afternoon she had not seen him as the door opened* の様な過去完了形を用いた文が入って来てしばらくの間、過去完了時制による描写がつづくわけでこの方法により過去のまたその過去の事件が鮮明に映し出されることができるのである。また Hemingway の書く文には主語や冠詞が省かれたり、極度に短縮されたり、またそのためいささか飛躍した様な構造が時々みられる。

Beggar had probably been afraid all his life. Don't know what started it. But over now. Hadn't had time to be afraid with the buff. That and being angry too. Motor car too. Motor cars made it familiar. Be a damn fireeater now. (The Short Happy Life of Francis Macomber) (乞食野郎はおそらくこれまでずっと気をもんでいたのだろう。どうしてそうなったのか判らない。しかし、それも今は終りだ。水牛が相手じゃこわがる暇なんかなかったし、また腹を立てていたこともそうさせたし、自動車もだ。自動車はそういう気持になじませるのだ。今はまったく鬼でも取って食いそうだ) *beggar, motor-car* に冠詞 *the, a,* がついていないし、また *Be a damn fire-eater now* という構造も面白い。文という形態を凝結しきればこのように断絶し、切断されたような個体に近い様な形となってあらわれるよりほかにない様に思える。

また “The Torrents of Spring” には次のパラグラフがみられる。

The elderly waitress looking at Scripps. Scripps looking at the elderly waitress. The drummer reading his paper and occasionally putting a little

ketchup on his hashed-brown potatoes. The other waitress, Manday, back of the counter in her freshly starched white apron. The frost on the windows. The warmth inside. The cold outside. Scripps's bird, rather rumped now, sitting on the counter and preening his feathers. (年配のウェートレスはスクリップスを見ていた。スクリップスもその年配のウェートレスを見ていた。行商人は新聞をよみながら時々ハヤシ肉ポテトに少しづつケチャップをかけていた。もう一人のウェートレスのマンディは糊のきいた白いエプロンをつけてカウンターのうしろにいた。窓には霜柱が見える。店内は温かい。外は寒そうだ。スクリップスの小鳥は少ししわくちゃになってカウンターの上にとまって嘴で羽をつついている。)

これをみても判るように動詞はすべて現在分詞の形をとっているし、その他の動詞は一切存在しない。極度に凝縮された書き方である。まるで、このパラグラフ全体が一つの凝結体を成している様である。The frost on the windows, The warmth inside, The cold outside, などの句構造も輪郭のくっきりした固まりとなって鮮明なイメージを与えずにはおかないのである。鮮明なイメージと言えば“A Canary for One”の中の The train was now coming into Paris and passing were the white walls and many windows of houses. Nothing had eaten any breakfast. (列車は今やパリの中へ入って行きつつあった。そして白い壁やたくさんの家の窓が過ぎ去って行く。見るものすべてがまだ朝食を食べていないようであった) この文における現在分詞 passing が前方におかれている進行形の書き方やさらに nothing を主語にして had eaten を持ってきた表現などは実に具体的であり即物的視覚イメージを与えると言うことができるであろう。

また“The Torrents of Spring”にはこの様なパラグラフが観られる。Yogi Johnson walking down the silent street with his arm around the little Indian's shoulder. The big Indian walking along beside them. The cold night. The shuttered houses of the town. The little Indian, who has lost his artificial arm. The big Indian, who was also in the war. Yogi Johnson,

who was in the war too. The three of them walking, walking, waking.

(ヨギ・ジョンソンは腕を小さいインディアンの肩にまわして物静かな通りを歩いていた。大男のインディアンは二人のわきを歩いていた。さむざむとした夜。雨戸をしめている町の家々、義手を失くした小男のインディアン、同じく戦争に行ったことのある大男のインディアン、これまた戦争に行ったことのあるヨギ・ジョンソン、彼等三人は休みなく歩きつづけた) この文においても進行形の動詞は抑圧されて、ただ現在分詞のみに抑えられているのが観られる。そして最後の文には walking. が三回くり返され、前方にある二回の walking の使用と相俟って動的な感じが一層強められ、全体に調子のいいリズム感がある。さらに同じ小説に次のような文もある。 Scripps O'Neil and his wife sat side by side. Mrs. Scripps knew now. She couldn't hold him. There was no holding him now. Mandy was talking again. Talking. Always talking. That interminable stream of literary gossip that was bringing her, Diana's marriage to an end. She couldn't hold him. He was going. Going. Going away from her. Diana sitting there in misery. Scripps listening to Mandy talking Mandy talking. Talking. Talking. (中略) She couldn't hold him. She couldn't hold him. She couldn't hold him. (スクリップス・オニールとその妻は並んで坐っていた。スクリップス夫人には今判っていた。今や夫を引き止めることができないうことをである。マンディはまたもや喋っている。夢中で喋っていた。しじゅう喋っていた。そのためにダイアナの結婚が破れようとしている。絶え間もなく流れるその文学的なゴシップを、彼女は彼をひきとめることはできなかった。彼は去ろうとしていた。ただもう彼女の許を去って行くばかりであった。ダイアナはみじめな気持で坐っていた。スクリップスはマンディのしゃべるのを聴いている。夢中でしゃべっている話を、彼女は夫をひきとめることができなかつた。もうとでもできないことだった、無理なことであった) これらの文をみても判るように、分詞形の talking が初めの方では4回反復使用されており、あとの方でもまた4回くり返されている。又 going は三回くり返されている。

Hemingway は現在分詞の語の反復使用を好んでいたと言ってよいであろう。更にこのパラグラフの終りのところでは 'She couldn't hold him' というセンテンスも三回反復されているのが注意される。このような平明な単文のくり返しは語の場合と同様に読む者に訴える力が強まってくるのは明らかである。

また他に反復の興味ある例もある。矢張り "The Torrents of Spring" の中であるが When you something something something there's no place like home. (おまえがなんとかで、かんとかで、なんとかなら、家庭にまさるものはない) という様なものがある。この様な something の反復使用は代名詞 something に動詞の機能や修飾語の機能を担わせている訳で something という語の個別化が一層鮮明化されていると言うことができ、はなはだ興味深いと言わねばならない。更にもう一例をあげると 'No. No. No. No. No. No. No.', she said I'm going right down to the chapel to pray. (The Gambler, the Nun and the Radio) (「だめ、だめ、だめ、だめ、だめ、だめ、だめ」と彼女は言った。「すぐチャペルに行ってお祈りをします」)

以上、みてきたように Hemingway は平明な語をいかに正確に適切に使うかと言うことに、神経をゆきとどかせていた文学者であることが判るし、また時には語、句、文の反復使用という技法によって、それらの個性を浮き彫りにすることに彫琢した作家であることが明らかになるのである。

3 語法について

(1) hell 等の口語的表現について

hell 等の語の多用が目につくのは口語英語として当然なことであると言える。Hemingway も好んで頻用しているこの hell は間投詞的に用いられて、立腹、皮肉、不信、驚きなどを表わす場合が多いようである。先づ the hell of it の形から例示しよう。

'Yes, he said.' That's the hell of it. You probably will. (God Rest You Merry, Gentlemen) (どうでもなれ。もどって来るだろうよ) 'The hell of it

is', I said to Pop, when I'm in the hills I'm sure the bastards are down there on the salt. (Green Hills of Africa.) (「一番しゃくにさわるのは」わたしはポップに言っけ。「ぼくが丘の上にいる時に限って、やつは下の塩なめ場にいるに違いないということなんだ), 'the hell of it is that it usually is too early or too late. (To Have and Have Not) (いまいまいしい話だがはやすぎたり, おそすぎたりするんだ)

the hell with の例

'Neither and I. The hell with them. The hell with them and the hell I'm not (Islands in the Stream) (俺だって平気だぞ, あいつらなど勝手にしやがれ, くそ喰えだ。俺は平気だぞ) The hell with it, thought Robert Wilson. The utter complete hell with it. (The Short Happy Life of Francis Macomber) (勝手にしやがれ, 全くどうとも勝手にしやがれ) To hell with の形もある。To hell with that radical bastard. (To Have and Have Not) (あの赤野郎なんか, くそ喰えだ)

The hell の例。

これはかなり多い。'He's gone', said Johnson. 'The hell he is', I told him (「逃げたぞ」ジョンソンは言う。「冗談じゃねえ」と私は彼に言った) The hell you don't, Yogi thought, if you've two years in the infantry at the front. The hell it was. (The Torrents of Spring) (歩兵として二年も戦線にいたら誰だってそんなに殺したりするものか。へん, その通りだとも)

Joe's the hell over towards Andy with the dinghy. (Islands in the Stream) (ジョゼフの奴, ボートをずっとアンディーの方に寄せちまってる)

'Who the hell's shot worse?' (To Have and Have Not) (いったいどっちの傷が深いって言うんだ) 'What the hell kind of place is this?' Tommy said. (The Light of the World) (いったい, ここはどんな所なのだろう) この the hell は自在に使われることが判る。What と kind の間に入っている。またこの the hell が動詞と密着して動的に用いられることも時々みられる。

‘You punks clear the hell out of here’, the bartender said. (The Light of the world) (あんたらちんぴらはさっさと出て行ってくれ) if you talk about it, I’ll pull the hell out of here. (Islands in the Stream) (その話しをするんなら、俺はとっとここを出て行くぞ) War cloud pulled up on Foxless that was going fast as any black horse could go with the jock flogging hell out of him with the gad. (ツァはカーカビルに追いついたが、カーカビルの方も騎手にむちゃくちゃに鞭打たれながらどんな黒馬にも劣らない速さで走った。) この場合には the のない hell のみの形になっている。‘I’m getting the hell out of here.’ (Islands in the Stream) (僕は失礼さしてもらおうぞ) I’m going to get that sullen character in now and pick up and get the hell to the farm house or the lodge. (Across the River into the Trees) (あのふくれっつらの人間を入れて、獲物を拾わせて農家つまりロッジへ引き揚ることにしよう) It bores the hell out of me. (Across the River into the Trees) (わたしのためにえらい退屈させるね) My old woman means right and does right and it beats the hell out of me every day. (Islands in the Stream) (俺のかみさんは心は善良で行いも善いし、そのため俺は毎日こてんぱんにされているよ) ‘Let me catch you drink anything but beer I beat the hell out of you. (ibid.) (ビール以外のものを飲んでる所を俺につかまってみろ、たたき出してやるぞ) hell は単独で使われることもある。when the planes unload they smash those anti-tank guns and just blow hell out of the positions. (For Whom the Bell Tolls) (あの飛行機が爆弾を落せばあの対戦車砲をこっぴみじんにし陣地から吹っとばす) 上記の例をみても判るように、動詞+the hell out of という一定のパターンがあることが判る。いかにもきびきびした口語表現であると言える。また I’m fond of them like the’re my boys and I worry the hell about them. (Islands in the Stream) (坊や達が俺の息子みたいにかわいくて心配でいけねえや)

この他 I wish to hell の例があって ‘I wish to hell they were better ord-

ers', Thomas Hudson said. (Islands in the Stream) (「もっといい命令でなくて済まん」とハドソンは言った。I wish to hell they didn't have any right (The Sun also Rises) (資格がないよう切に望むよ)。また変形された I wish the hell you were a soldier with your straight true brain and your beauty-memory. (Across the River into the Trees) (君のように一直線にものを考える頭といい記憶を持った人は軍人になるとよかったんだがなあ)

また慣用句をなしているものもある。The foreman Yogi thought, he'll catch hell tomorrow. (The Torrents of Spring) (あの職長を明日ひどい目に会わせてやろう) catch hell は俗語である。また give...hell という言い方もある。That old willie, he thought. He was giving them hell. (To Have and Have Not) (あのウイリィのやつ、彼は考えた。あいつらに苦い目見せてくれたな) 'Was a bad year' Thomas Hudson said, Rain gave the crop hell. (Islands in the Stream) (今年是不作だね、雨ですっかり駄目だ)、また俗語的な言い方として raise hell がある 'We raised enough hell so they couldn't keep us there. (To Have and Have Not) (おれたちは大暴れしてたんでおいとけなくなったんだ) この raise hell と並行して raise the devil という似た言い方もある。

It's full of those Veterans from up on the Keys. They always raise the devil. (フレディの店はキーズから来る退役軍人たちで満員だからね。あいつらは何時でも大騒ぎを起こすからな)

これは "To Have and Have Not" からの例。ちなみに devil には次の様な言い方もある。He was a devil too, and devilled his older brothers (Islands in the Stream) (あれも腕白で、二人の兄をしたたかいじめた) devil の動詞用法でアメリカニズムである。

以上の様な主に hell を含んだ、よくない意味に用いられる表現に似た慣用句としてもう一つ付け加えておきたい。'He gives you the willies out of his head like that! (To Have and Have Not) (あんなことを言いだされると、頭にきて、

ぞっとしますな) give...the willies はアメリカの俗語表現である。

純然たる強意用法としては But drinking sure as hell isn't helping any now. (Islands in the Stream) (しかし、酒を飲むのが今はためになってないことは確かだ) I'm glad as hell it isn't. (Across the River into The Trees) (そうでなくて、わしは実に嬉しいよ) 等がある。

また hell を一時的に動詞として用いている面白い例がある。He was watching us helling along. (The Short Happy Life of Francis Macomber) (彼はわれわれがむちゃに車をとばすのを見ていた)。

それから、a hell of a lot の副詞用法の例もある。これもくだけた口語用法である。'You can't blame him such a hell of a lot. (The Sun also Rises) (そんなにひどく彼を非難できないよ) 'Really. Only I'd do a hell of a lot rather not talk about it. (ibid.) (ほんとさ、そんな話はいやなんだ)

次に「のろい」の気持を表わす。goddamn について述べる。単なる damn より goddamn の使用が多い様に思う They could step the goddamn mast daytime (Islands in the Stream) (マストなんて昼間だけ立てて後は外しとけるからな) I'm just feeling about the goddamn best I ever felt ever. (ibid.) (とにかく俺はご機嫌、生れて初めての最高の御機嫌さ) Goddamn if we don't. (Green Hills of Africa) (あたりまえさ) 'Damn crook', he said. 'Goddamn Crook'. ('べてん師め' と彼は言った「ひでえべてん師だ) damn より goddamn の方がさらに意味が強いようである。They're goddamned careless then (Islands in the Stream) (けしからん。奴等は不注意だな) 'A grief hoarder, Willie said. 'I never thought you'd be a goddamned grief hoarder. (Islands in the Stream) ('悲しみの溜め込み屋か' とウィリィは言った。俺はまさかあんたが悲しみの溜め込み屋になるとは思わなかった)。これらの例の様に 過去分詞形の goddamned となることもある。damned の例として I damned well was, too (The Sun Also Rises) (わたしはほんとに病気だったよ) また合成語をなしている What a damn-fool thing to do. (ibid.) (なんてばかなことをしたんだ)

もある。また a damn sight (はるかにずっと) の様な言い方もある。You'll be a damn sight sicker when Walcott gets through with you. (Fifty Grand) (ウォルコットにやつつけられたら、もっとうんざりするぞ) I'd a damn sight rather be in town with the wife (ibid.) (俺は女房と町にいる方がいいな) If you don't feel well you are going to feel a damned sight worse. (Islands in the Stream) (気分が悪けりゃじきにもっと悪くなるようなことが待ってるよ) 次に not give a damn (少しもかまわない) の俗語用法もよく用いられる。Eddy said, 'I don't give a damn about anything since that fish.' (Islands in the Stream) (「エディは言った。俺はあの魚以来万事くそ喰えて気になってる) Who gives a damn. (ibid.) (かまうことねえだろ?) I don't give a damn who shot you. (The Gambler, The Nun, and the Radio) (誰れが射ったかはどうでもよい) この慣用語は普通否定表現をとるのであるが、肯定の意味に用いられることもないではない。You give a damn about so many things that I don't. (The Snows of Kilimanjaro) (君はおれがどうでもいい色々なことを気にするね) この表現に類似した言い方として shit (卑語で「くそ」という意) を含む give a shit という形がある。勿論、俗語的表現であると言える。'I'll do everything', Eddy said. But I don't give a shit about anything any more. (Islands in the Stream) (「万事任しときな」とエディは言ったが「でももうどんなことになろうとへいちゃらだ) 'Now I don't give a shit I lost him,' David said. (ibid.) (「奴を釣り落したことなんて屁とも思っちゃいない」とデイヴィッドは言った) この文では don't give a shit が I lost him を目的語にとっている。Get your junk hung. I don't give a shit if it shows. (ibid.) (あのやくざな道具は肩に掛けとけ。見えたってかまやせん) また、更に似た言い方としての fuck の用法がある。"Fuck oblivion" said Roger. (Islands in the Stream) (「冥土なんかくそ喰えだ」とロジャーは言った。Fuck how you feel, you sea lawyer. (ibid.) (屁理屈専門の船乗りだな、あんた。あんたの気分など知ったことか) この fuck は Dictionary of American Slang

によると、hell や damn と同じく an expression of extreme dismay, anger, disgust or the like であり、否定的意味を含ませていると言える。上例の fuck はさしづめ to hell with と言い換えることができるであろう。

次にまた bastard という語を用いた表現も活発である。bastard は大英和辞典(研究社)によると、卑語で(男に対して使う悪口、「野郎」、「やつ」と言う意味である。‘Bastard’s been drinking, too,’ I said. (Green Hills of Africa) (この野郎も一杯やってきたんだな) わたしは言った。‘Bastards,’ said P.O.M., staying with me, in my unreasonableness. ‘Sonsabitches.’ (idib) (「ろくでもないやつらなのよ」無理を言うわたしの味方をして、P. O. M. が言った。「うす汚いやつらなのよ」I’m just a lousy belly-aching bastard. (ibid.) (全く俺はぶつぶつこぼしてばかりいる野郎だ) belly-ache とはアメリカの俗語で「苦情を言う」という意味である。

この bastard とする語の意味も応用されて、用法に変化が起る。I was sorry I was such a bastard about the camera. (Green Hills of Africa) (カメラのことであんなろくでもない態度をとって悪かったと P. O. M. はあやまった。) it was cold as a bastard. (ibid.) (ひどい寒さだった)

I’m nervous as a bastard because I’m worried and I don’t worry easy. (The Fifth Column) (ひどくいらいらしてる人ですよ。気になってるんですね。すぐには気にならないちなんですが)

son of a bitch という語もなかなかよく用いられる。これはカレッジクラウン英和辞典(三省堂)によれば俗語で(軽べつして)やろう、ちくしょう、ろくでなしの意味を表わし、また驚き、困惑の叫びを表わすとある、But the son of a bitch claims you can’t eat ‘em’. (To Have and Have Not) (こんちくしょう、食えねえとぬがしてるぜ) The son of a bitch is coming up (Islands in the Stream) (あんちくしょう上って来る) ‘Son of a bitch’ll weigh a thousand pounds,’ Eddy said. (ibid.) (あんちくしょう千ポンドはあるぞ) son of a bitching という分詞形もある。What the hell did he have to blow that

lick to hell for the first morning and gut-shoot a lousy bull and chase him all over the son-of-a bitching country spooking it to holy bloody hell?

(なんだってあのろくでもない雄牛の腹なんか射ったあげくそこいらじゅう追いかけて回してあたりのやつらをおじけづかせてしまったんだ)。その他 ‘If General O’Neil were here, you dastard,’ his mother had said, ‘You’d never have put a match to that house. (The Torrents of Spring) (「オニール将軍がいなすったら家にマッチで火をつけさせたりするものかね、このひきょう者」と彼の母は言ったのだった。) の様な例がある。更に ‘Drat the wind’ Scripps said. (ibid.) (「うるさい風だ」とスクリップスは言った) がある。drat は卑語で「のろい」の言葉である。

(2) plenty 等の修飾語

He was mad and plenty brave. (To Have and Have Not) (やつは憤慨してえらく気が強かった) I was plenty sore. (ibid.) (ひどく腹が立った) I could see plenty smoke from out where they’re burning garbage. (ibid.) (くずをもやしている所から煙がたくさん出ているのが見えた) They were all plenty scared. (ibid.) (彼等はみなひどくおびえていた)

bloody の使用も多く見られる。But tell him to keep his bloody mouth shut. (Green Hills of Africa) (黙っているように言っておいてくれよ) The biggest bloody kind (ibid.) (とてつもなくでっかいやつだよ) ‘Yes’, I said. ‘Bloody well yes.’ (ibid.) (「持つんだ」と私は言った。「なにがなんでも持つんだ」) ‘No,’ I said. Then in English, ‘Too bloody tired.’ (「いや」と私は言った。それから英語で「くたくたでそれどころじゃないよ」) もっとも bloody のこれらの用法は元来は英国の俗語であってアメリカ語法とは言えないと思われる。その他 The cocked gun, behind my back, made me black angry. (Green Hills of Africa) (すぐ背中の上しろで銃の打ち金が起きていたかと思うと腹の中がにえくりかえるようであった。black はアメリカのスラングで「全くの」「徹底的

な」の意である。‘That’s mighty interesting,’ I told him. (ibid.) (「それはとても面白い」と私は彼に言った)

mighty は口語用法である。また He was wore down almighty thin when I left. (Islands in the Stream) (俺が店をでる頃は、彼はかなりうんざりしていた) almighty はアメリカの俗語である。Besides, it was beastly cold. (The Torrents of Spring) (おまけにやけに寒かった)

(3) good-looking と good looking の型

この型における形容詞と looking の結び付きは Hemingway の英語では両形が用いられていて固定していない様に思われる。He was a nice-looking boy all right. (To Have and Have Not) (彼は全くあいきょうのある少年であった) the other one, Pancho, was a little taller but the same sort of looking kid. (ibid.) (もう一人のパンチョは一寸背こそ高かったが同じ様な様子の子だった) ここでは自由なゆるやかな形になっている。Sort of dancy and tight looking with the jock keeping a tight hold on them (=the horses) (My Old Man) (ダンスでもしているみたいにさっそうとした緊張した様子をし、騎手はその馬をしっかりと御している) この文では dancy と tight が共通に looking に結び付いていると考えられる。より自由な結びつきであり、およそハイフンなどには careless である。更にもう一例, the old man came back with the skimmiest, hungriest, most un-successful looking of wanderobos. (Green Hills of Africa) (これまで見てきたワンデロボ族の中でも一番やせて、ひもじそうな、一番不運そうな男をつれて戻ってきた) 一層自由な表現になっているのが判る。このほか feeling の例もある。

He was shaky and hollow sick feeling inside. (Islands in the Stream) (震えがきて躰の中がうつろで胸がむかつく様であった) He sat there, sweating under arms, his mouth dry, his stomach hollow feeling. (Happy Life of Francis Macomber) (腋の下に汗をかきながら、彼はそこに坐っていた。口はか

らからに渴き、胃はからっぽな感じがした) このように形容詞+looking や形容詞+feeling の場合にはそれぞれの形容詞が looking や feeling の補語という関係になっていることは明らかである。

しかし、また Hemingway にはこれと異なる型 flat adverb+ 現在分詞の型がみられるのである。‘Good night,’ said the young pleasant speaking one. (To Have and Have Not) (「休みなさい」気持のいい口をきく若い男が言った) He was mean talking now. (ibid.) (全く小憎らしい口をききやがる) Harry asked pleasant-speaking one. (ibid.) (ハリイはその気持のいい口をきく若い男に訊ねた。ここではハイフンで連結されている。He was a nice-looking boy. Pleasant talking, too (To Have and Have Not) (全くあいぎょうのある少年であった。それに口のきき方も感じがいい)

(4) 接続詞について

普通except that~ の様に that があるのであるが、この that のない形がみられる。Except there’s my gun on the boatt (To Have and Have Not) (そのボートに俺の銃がある以外は) Make it top sergean. in the old days’, except he’s dealing always with the brass. (Across the River into the Trees) (昔の上級軍曹ということにでもするか、いつもお金を扱っている点だけはちがうけれど) I couldn’t tell how it looked except it looked all changed. (To Have and Have Not) (すっかり変ってしまった様に見えると言う以外にどんな様子か言えないくらいだった) このような except の接続詞としての用法は標準英語ではない、古い用法と言ってよいであろう。

また接続詞用法の the next thing などの言い方も口語らしく明確なイメージを与える。The next thing he knew he was running, running wildly. (The Short Happy Life of Francis Macomber) (あっと思った瞬間、彼は走り出した。気がいみたくに走っていた) The first friendly thing he does, he will have made a decision. (For Whom the Bell Tolls) (親切なことをし始めた

以上、彼は決心したのであろう) これは the first のほかに friendly と言う付加詞の加った名詞句である。これが接続詞化するのには口語の妙味と言うことができよう。ヘミングウェイ英語の特色があざやかに出ている。

look (seem) like+clause の表現も Hemingway にはよくみられる表現である。会話的表現である。they looked like they had plenty of money. (To Have and Have Not) (彼等はしこたま金を持っているように見えた) then that bell goes off and it seems like it rings for a thousand years. (My Old Man) (それからベルが鳴り出し、まるで千年も鳴っている様に思える) Seems like in Milan everybody is going somewhere and all the trams run somewhere. (My Old Man) (ミラノではだれもどこかに動いており、電車がみんなどこかを走っているように思える。The Cap is treating you like you were his own mother. (To Have and Have Not) (この船長は旦那を自分のおふくろ扱いしてるよ) この場合は like 以下の節の中が仮定法になっているのが注意される。更に興味ある形として 'It seems like a mouse coming out of his hole,' Augustin said. (「ねずみが穴から出てくる様に思われる」とオーガスチンは言った。'This looks like a big night coming on,' the other Vet said. (「今晚も乱痴気騒ぎになりそうだぜ」ともう一人の退役軍人が言った) これらの文において be 動詞が欠如しているのが注意すべきである。進行形においては be 動詞よりそれと連語をなす現在分詞の方がより重要であるから発話の場合にも発音されないとすることも起るし、また文字としても省略されることも有りうると思われるが、またこのほかいわゆる原インド・ヨーロッパ語に通有な文形式として動詞のない主語と述語の並列構造があるが、あるいはこの原始的構造の影響によると推定することも可能であろう。いずれにせよアメリカ英語⁽³⁾に固有な語法と言うことができる。

the last の接続詞用法がある。The last I heard of him the Swiss had him in jail near Sion. (The Revolutionist) (彼についての最近の消息ではスイス人がシオンの近くで、彼を投獄したとのことであった)

また次の例もある。Times when he was drunk the sound of the whistle of the trains at night pulling up the Boyne Falls grade seemed more lovely than anything this chap Stravinsky had ever written. (The Torrents of Spring) (泥酔していた時期には夜間にポイン・フォールズの急坂を登ってゆく列車の汽笛の音があのだらヴィスキーが作曲したどの曲よりも美しく思われた(これら二例とも名詞形式に抑えた表現であり、また colloquial である。

また次の様な言い方もある。Every way you looked there were other mountain, and ahead the road stretched out white across the plain toward Pamplona. (The Sun Also Rises) (どっちを見ても山があり、前方には道が平野をよぎってバムプロナの方へ白くのびて走っていた) every way のきびきびした接続詞用法である。

また as soon as のあとに節が来ないで名詞句に抑えられた形が来ている場合もみられる。We were going down to Schruns in the Vorarlberg in Austria as soon as the first snowfall there. (A Moveable Feast) (オーストラリアのフォルアルベルグにあるシュルンズへ初雪の降ると同時に行くつもりになっていた)

省略された that の例。‘Dave stopped him is the main thing,’ Roger said. (Islands in the Stream) (肝心なのはディブが奴をなんとかストップさせたことだ) この様に文頭に節が置かれた場合、接続詞 that が絶対に必要であると言うのが文法書の説くところであるが、上例のように that が省かれている。文法無視の表現であると言える。

no matter why の例。これは接続詞ではなくして関係副詞の例になるが次の文がみられる。He knew that what David was doing was what he should do no matter why he was doing it. (Islands in the Stream) (たとえ、どんな理由によるにせよ、ディヴィッドがしようとしていることは当然のことであるということを知っていた) この文における no matter why という形は普通ではないであろう。新英和中辞典(研究社)によると no matter と結びつく形は no matter what (which, who, where, when, how) である。標準的語法とは言え

ぬであろう。

(5) 比較の表現について

the+比較級……; the+比較級……の比例比較級の形式は破られることがある。I found I felt much better the more things I could pay for. (A Moveable Feast) (私はいろんな支払いを自分ですればするほど、気分がよくなった) にみられるように the better とならず much better が用いられている。また一方の the は省かれることがある。Easier I can make them take it beforehand the better. Smoother everything goes the better. (To Have and Have Not) (先手をうってやっつけられるといいが、万事とんとん拍子にゆくのがいいっていうもんさ) また better を含む全く短縮された構造がある。勿論口語表現である。Not yet, he thought, no, better not yet. (To Have and Have Not) (「まだいかん」と彼は思った。「まだやらんほうがいい (これは (you had) better not (do it) yet. の短縮されたものであろう。

また Hemingway は「いままででない」という意味の最上級の表現として次の様な短縮された書き方をしている。He was the best guiter player ever in the town. (The Gambler, the Nun and the Radio) (彼はこの町で今まででない上手なギター弾きだ (Now the trailing was the hardest yet (Green Hills of Africa) (追跡はこれまでになく難しかった) また This attack was going to be his biggest show so far. (For Whom The Bells Tolls) (この攻撃は彼の今までの一番大仕事になりそうだった。)

また「すべての中で」という最上級のあとに来る語句に of the lot が使われる場合がある。‘I love it,’ said Spellman. ‘I got for it above anything else. You’re absolutely the best of the lot (To Have and Have Not) (「大好きなんです」とスペルマンは言った。「なによりもいいと思います。あなたは絶対に最高の作家ですよ) また次の文もある。You got the most class of anybody I ever seen. (The Sun Also Rises) (あなたはお会いしたかたの中では一番品位

を持ってられます) all の代わりに anybody となっている。

(6) 時制の表現について

時制の表わし方については Hemingway の小説の中には、いわゆる規範文法のルールからはずれていてかなり自由な表現がみられる。They all got kids. Ever see a taxi driver without kids? (To Have and Have Not) (彼等にはみな子供がいる。子供のいないタクシーの運転手を見たことあるかい (How long you know him? (ibid.) (彼を知ってからどれくらいになるの?) 'He's here about two years,' Frankie said. (ibid.) (彼はやく二年ここにいる) とフランキイは言った。he said 'you ever lift a dead man before, Cappie?' (ibid.) (「死人を運んだことがあるかい、船長?」と彼は言った) The first time I ever meet you since I went away. (Islands in the Stream) (私が出て行ってからあなたに会うのは今日が最初) 今度は since 以下の節が現在時制になっている例。'That's the first time he's called her since he's out here,' Hogan said. (Fifty Grand) (「ここへ出てから、やつが細君に電話をかけたのは初めてだ」ホーガンは言った) 次に since 以下が現在完了になっている例を示す。It is ten days since I have been here waiting to see him. (The Capital of the World) (あの方にお会いするために十日も待っているんですよ) since は動作や状態の起点を意味するのであるからそれ以下の節の中の動詞は過去形をとるのが当然であるが、上記の二例はいずれも現在に重点を置いた表現になっていて興味深い。論理を無視した心理の面を重んじたいいわゆる主観的な思考によるものであって口語精神の極度に発揮された段階と言うべきであろう。次の様な文も Hemingway は書いている。I think he is getting a little tired since we have been in love. (Islands in the Stream) (私とあなたが愛し合うようになってから夫はいくぶん疲れてきているようですね) He started to give cries when they shoot him and he is giving cries ever since. (The Gambler, the Nun and the Radio) (彼等が彼を射った時、彼は泣き出した。その後ずっと泣きつづけている) これ

らの文では主節のところが現在進行形になっているのが興味を惹く。これもいかにも口語的思考に即した表現のように思える。現在進行形が現在完了進行形の代用をつとめることはアイルランド⁽⁴⁾語法では普通であると言われる。上記の文における現在進行形の使用もアイリッシュ・アメリカンの一種と考えるべきであろう。

I love you more since I saw that thing. (Across the River into the Trees)
 (あれを見てから一層、あなたを愛してるわ) love は状態の持続を表わしているから単純現在形の形で書かれている。‘Daughter,’ he said. ‘How long has it been since I told you that I loved you?’ (ibid) (「娘さんよ」と彼は言った。

「あんたを愛していると私があんたに言ってからどれくらい経つかな?」) it is long since と it has been long since の型は Hemingway では併用されている。It’s years since I’ve kissed a bullfighter. (For Whom the Bell Tolls) しかし、この場合も since 以下が現在完了形になっているから、いずれにせよ、Hemingway は tense に対してさして厳しくないと言ってもよいと思われる。

ほかに、Hemingway の特色とみなされるものに since a long time (ここ久しい間) という語句の使用がある。‘Since a long time I haven’t seen him. (Islands in the Stream) (しばらく見かけませんがね) Since a long time we had all felt good about Karl’s rhino. (Green Hills of Africa)) カールの仕止めたサイに対する心のしこりはずっと前からよくなっていた), この since は前置詞で OED にも Thakeray からの例文 He sleeps since thirty years. (彼はここ30年の間眠っている) が出ている。しかし since のこの様な用法は普通とは言えないのではなからうか?

Hemingway はまた過去完了に相当する言い方も、現在完了に相当するそれも無差別に使っている。Eddy, it was the greatest thing I ever saw. (Islands in the Stream) (エディこんなすばらしい物は見たことがなかった) ‘I tell you, Mr. Johnson,’ Eddy said ‘that’s the rarest occurrence I ever saw in my life.’ (To Have and Haue Not) (ねえ、ジョysonさん、これは世にもまれなる

出来事であらう)

Hemingway は since に導かれる従節を含んだ過去の文では主節従節共に過去完了で表わす場合がより多い様に思える。Ever since they had grounded he had felt, in a way, relieved. (Islands in the Stream) (乗り上げてからというもの、ハドソンは、或る意味で執行猶予を与えられたような気がしていた。) Chon had been rather nervous ever since we had met at Bayonne. (The Sun Also Rises) (バイヨンネで会ってからずっとコーンはかなりいらいらしていた) Ever since I'd see the Chink and taken the money I'd been worrying about the business. (To Have and Have Not) (チャン公に会って金を受取ってからずっと私は仕事のことが気がかりだった)

また before を含む文にもこの様に連続的に過去完了を用いる書き方がみられる。He had been on the bridge nineteen hours before they had come in. (Islands in the Stream) (港に入る前19時間、ブリッジに立ちつくした)

「時制の一致⁽⁵⁾」については Hemingway は時々自由な書き方をしてそのルールを破っている。Whenever I knew I would not have to go to a school nor have to work, I was happier than I have ever been. (Islands in the Stream) (俺が学校に行くこともまた仕事をしなくともよいと判った時はいつもこの上なく嬉しかった) He had one of the finest and most delicate senses of humour I've ever known. (ibid.) (あの子程優れたデリケートなユーモア感覚の持主は僕もあまり知らん) I saw one of them looking at the corner of the door and he saw the beach eviently because he begins to chatter. (To Have and Have Not) 奴らの一人が戸口の隅から眺めているのが見えた。やつがぺちゃくちゃしゃべり始めたからきっと海岸が見えたのだ) 従節の beginが現在形になっている。I was thinking to myself that this Johnson had fished fifteen days, finally he hooks into a fish a fish-man would give a year to tie into, he loses him, he loses my heavy tackle, he makes a fool of himself and he sits there perfectly content, drinking with a rummy. (To Have

and Have Not) (このジョンソンの奴は15年間も魚を捕っていて漁師なら一生を棒にふってもいいような大きなのをひっかけて逃がしてしまう、俺のずっしりした釣道具を失くして笑いものになる。それでいて満足し切った様子でのんだくれの奴と酒なんか飲んでやがる、と俺は心の中で思っていた) 主節が過去の間接話法のわくを破ってほとんど現在時制で書かれている。時制の一致に careless な自由な表現であると言える。

(7) Contact Clause について

contact clause の場合は、普通 there is...や I have... やまた it is... で始まる文の後で起るとされている。しかし Hemingway の小説では主に会話の文中であるが、これらいずれの型にも属さない contact clause の表現がみられる。I'm not one of these chaps likes being knocked about. (The Sun Also Rises) (ここの奴らのようになぐり合いが好きじゃないんだ) He's the one makes the noise. (The Snow of Kilimanjaro) (夜になるとなき声を立てるのはあいつらのね) One time a fellow came here came to me and said. (Wine of Wyoming) (いつもここに来る男がいつだったか私の所へ来て言った) Get one hasn't any kinds. (To Have and Have Not) (子持ちじゃないやつにしな) People ain't never tried them don't know. (ibid.) (男を知らない人には判りっこない) これらの文は普通なら主格の関係代名詞がなければならぬのだが欠如している。この様な⁽⁶⁾傾向は Irish English では珍らしくはないと言われるが、いずれにせよ、俗語表現の好例と言うべきである。

(8) I like us to~の型

Hemingway の作品の中には表題の形式が時々みられる。I'd like us to be married and work hard and have a fine life. (The Fifth Column) (結婚していっしょうけんめいに働いて、いい生活をしたいわ) But I'd like us to get better organized than we are now. (Islands in the Stream) (しかし、俺は

とにかく物事をもう少しきちんと準備したくてね) I want us to have some sort of home-life. (The Fifth Column) (わたしたちで家庭生活のようなのを持ちたいと思うわ) I just want us to win this war (For Whom the Bell Tolls) (ただ俺はこの戦争に勝てばよいと思っている) これらの表現では主語である I が us (I を含めている) に対して～して欲しいと思うのであるから論理的には少しおかしく感じられるが文法的には成立する構造である。やはりアメリカの colloquial な表現の特色がみられる。

(9) その他の語法表現

“To Have and Have Not” という小説には次のような型の文が三回出ている。It would be better alone. It would be much better alone. Anything is better alone. (一人の方がいいだろう) (なんでもひとりの方がいい) の様な意味を表わしているが alone という語が極めて縮約された表現になっているように思える。初めの二文ははなはだ類似した構造の文であり、主語の it は形式主語の it ととり alone を to be alone または being alone の単純化された構造と考えることもできよう。しかし、最後の文の alone は anything と補語の関係を成していると考えられるわけで When it is alone とみれば一種の擬似補語になっていると言える。

また同じ小説にこの様な表現もみられる。I thought, hell he's as well off dead as the way he is. (俺は考えた。野郎、奴なんか死んだ方が仕合せじゃねえかと) また But listen, sailfish is just as good eating as kingfish. (だがね、またカジキだってニベに負けぬ美味しい魚ですよ) これら文もそれぞれ if he is dead, if one eats it の様な副詞節が潜在している表現と言えるであろう simplified された表現であると言える。

After the Strom という短篇小説には I was the first boat and you never saw water like that was がある。(おれが一番乗りだったが、誰もあんな水は見たことがあるめえ) I was the first boat out もずいぶんストレートな表現で

あると言える。論理的には一番最初のボートで海に出たとなるわけでこれの英語は I was out (at sea) on the first boat のようになると思われる。直截的な表現を好む口語の感覚があらわれている。

そのほかまた I remember once out at St. Cloud. (My Old Man) の様な表現もある。論理的には「私はあるときサン・クルーで起こったことをおぼえている」と言う意味になるのだが、これもかなり simplified された言い方である。once は「あるとき」で副詞であり、out at St. Cloud も副詞句である。これを論理的な英語構造に書き換えれば I remember something that once happened out at St. Cloud と言うことにもなろうか。口語にふさわしい飛躍のある表現であると言える。

「My Old Man」には次の様な表現がみられる。Looked as though you could walk across their backs they were all so bunched and going so smooth.

(馬はすべて一塊になってすべるように走っているのでそれらの背中を横切って歩けるようであった) When he (=the horse) went by me I felt all hollow inside he was so beautiful. (それが私のそばを通って行ったとき、それが非常に見事な様子であったので私はただぼかんと見ているだけだった) 初めの文は they were so bunched that you could walk... が論理的な構文であり、あとの文は he was so beautiful that I felt... である。口語表現のよい例と言えるであろう。

また同じ小説に Sweating heavy and he'd just be dogging it along with his eyes on my back. (汗びっしょりになりながら私の親父は私の背後をにらみながら一生けんめいについて来るのであった) この文では分詞構文がコンマでへだてられないで and によって主文に続いてゆく様な一種の破格的な形をとっている。

また同じ小説にこの様な言い方もある。he'd look over at me and say, 'Where's your girl, Joe?' to kid me on account I had told him about the girl that day at the next table. (親父は私の方を見て言うのだった「あの娘は何処

にいるのかね? ジョー」あの日、隣りのテーブルに居たあの女の子のことを親父に話していたもんだから私をからかうつもりで言ったのである) on accountを接続詞として用いている訳でこれも普通みられない用法と言える。

またget started (do) ingのような言い方があるが、これはstart (do) ingと同じ意味であると言える。ただstart~ingに比べると、より口語的な表現の様に思える。とくにget+startedの表現に「起動相」的観念がいちぢるしくあらわれていると言ってよい。I got to get started doing something no matter how I feel. (To Have and Have Not) (私の気持がどうであれ、何かを始めなくちゃならない) Some of the things I'd say he'd laugh and he'd get started talking about things. (My Old Man) (私の言うことのいくつかを親父は笑った。そして彼は色々な話を話し始めるのであった。

・「~しても意味がない」と言うことを表わすのにHemingwayは時々there is no sense to doの形を用いているのは興味がある。普通、一般的な形として辞書などに出ているのはthere is no sense in doingである。Hemingwayはこのあとの形と前の形とを並用しているのがみられる。There's no sense to get plugged with me. (To Have and Have Not) (俺に八つ当たりしたって意味はないぞ) I thought there's no sense to do it now. I'm going to need him now. (ibid.) (俺は思った。今やったってつまらない。今に奴も必要になってくるぞ) またBut then I thought there's no sense spoiling it by doing something you'd be sorry for afterwards. (ibid.) (しかし、その時、俺は考えた。あとで悔むようなことをやって、折角の気分を台なしにしてもつまらないぞ) There wasn't any sense in wasting gas. (ibid.) (ガソリンを浪費するのはつまらなかった)

また次のような言い方も普通、みられない形であろう。You put up fifteen hundred dollars for if anything happens to the boat. (To Have and Have Not) (船に万一のことがあった場合のために千五百ドル積立ててもらおう) forと言う前置詞のあとにif以下の副詞節が来ている形をとっている。破格的構造で

あると言えると思う。keep+目+from 及び prevent+目+from に当る一層口語的な表現として Hemingway) get+目+from. という形を用いている。‘Can you get them from talking?’ (To Have and Have Not) (やつらにしゃべらないようにさせることができるかい?)

4 むすび

Hemingway の英語の文体的な面については本稿の「表現法について」ですでに述べた通りで付け加えることはないが、Hemingway は無駄な言葉をできるだけ抑えて吾々に親しみ深い言葉で簡潔明快に表現することを身上とした文学者である。たしかに平明な文章であったが、決して調子の低いものではなく芸術的な香りをただよわせているのである。かの「The Old Man and the Sea」の美しい硬質的な文体は吾人に或る種の感動を与えずにはおかぬであろう。

また語法の面についてみると Hemingway ならではの特色ある表現が発見できて興味深かった。より自由な表現、より新しい言い回しを求めるのが口語精神の生き生きとした姿であると言ってよいが、矢張り、Hemingway の英語にもこの精神がさまざまな形で例えば「時制に対するルーズな感覚」や自由な「接触節」の用法そのほかに具現されているのが観られる。そしてそれはアメリカ口語精神につながるものであることは確かである。

記述的見地からみてゆくと Hemingway を初めとしてまだまだ興味ある語法上の問題がアメリカ英語の中に見出されてゆくことは疑いないことであろう。

注

- (1) hell が述語に用いられている例を追加する

It's hell for him to shoot in front of everybody (Green Hills of Africa)

(あいつはみんなの見てる前で射ったりするのが大の苦手なのさ)

Sure it's hell keeping it down, Joe. (My Old Man)

(からだをふとらせまいとするのはまったくつらいよジョー)

- (2) ‘Retain you hell,’ Freddy tells him. (To Have and Have Not) (おかかえなんて冗談じゃねえ)

アーネスト・ヘミングウェイの作品にみられる言語表現

- (3) like を as if の意味の接種詞に使う用法はアイルランド英語では珍らしくないがこの型については谷口次郎氏の「Irish English」には記述がない。
- (4) 谷口次郎氏の「Irish English」 p. 58
- (5) 一例を追加する。

About four O'clock when we're coming back close in to shore against the stream (中略) the biggest black marlin I ever saw in my life hit Johnson's bait. (To Have and Have Not) (4時頃岸の間近まで潮流に逆ってもどってきた時今まで見たこともないほどでっかい黒いマカジキがジョンソンの餌にくいついたのだ)

- (6) 谷口次郎氏「Irish English」 p. 85. 25.3

参考書目

尾上政次 米語文法 (研究社)

Richard Bridgman The Colloquial Style in America. (Oxford University Press)

豊田 実 アメリカ英語とその文体 (研究社)

谷口次郎 Irish English (篠崎書林)